1　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

文章1

或る雨の日に、私は母に用事を言われ、近所まで届けものに行き、一人の少年と出逢った。

醤油工場の軒下に、私と同じ歳くらいの少年が妹らしき少女と二人で立っているのを見かけた。少年は雨雲を見上げてしかめっ面をしていた。どうやら雨宿りをしているようだった。届けものをしての帰り道、工場の前を通りかかると、二人はまだそこにいた。

――こんな雨くらい濡れたって平気なのにな。家まで駆けて帰ればいいのに……。

と私は思った。

その時、少女が私の顔をじっと見て、急に泣き出した。私は自分が何か悪いことをしたのだろうか、とびっくりした。少年が彼女の肩に手を置き、なにごとかをささやいたが、妹はだだをこねるように身体をよじらせ泣き続けていた。

「ねえ、どこまで行くの？」

私が声をかけると、少年が私の家からさらに海寄りの町の名前を口にした。

「僕もそっちだから傘に入っていきなよ。」

「本当に？　ありがとう。」

（右下へ↘）

↙少年はかすかに笑い、妹と傘の中に入ってきた。歩き出すと少年の方はちっとも傘の中に入らず、妹を守るようにしていた。

「君が濡れてしまうよ。」

私が傘を少年の方へずらすと、

「俺はいいんだ。妹は少し身体が弱いから。」

と笑って答えた。

――そうか、妹さんの身体の具合いが悪かったのか……。

私は、二人が素足にサンダル履きで雨の泥のはねで汚れているのに気付き、なんだか長靴を履いている自分が情なく思えた。私と少年の間にはさまれて、少女は黙って歩いていたが、途中、径の前方に一匹の蛙が跳ねているのを見つけて、大声で指さし、蛙が草むらに消えたのを見守り、嬉しそうに少年を見上げた。そうして私を見た少女の瞳はとても澄んでいた。私は美しい瞳に見つめられて、頬が熱くなった。

家の前に出ていた母が、私たちを見つけ、母は傘を兄妹に渡し、二人は雨の中を海の方にむかって歩いて行った。途中、少年は何度も振りむき、頭を下げた。

「あの女の子は身体が弱いんだって。」

私が母に言うと、

「良いことをしましたね。」

と母が珍しく私を誉めた。

（伊集院　静「長靴の音色」による）